

創立30周年に思う

鹿児島大学名誉教授 井上昌一
(元 予防歯科学講座)

この春には鹿児島大学歯学部が創設されて30周年を迎えるとのこと、誠に慶賀の至りです。学部の草創期にあった昭和54年春に開設された予防歯科学講座の主任として着任し、以後24年間にわたってその席を汚した者として、感慨一入のものがあります。

当初は隣接する医学部の研究棟と附属病院の一隅に仮設された研究室と診療室において鹿児島での大学生活を始めた当時の状況を今は懐かしく思い出します。元より浅学非才、時には怠惰に流れて、在任中を通してその重責を十全に全うしえなかったと内心は些か忸怩たるものがありますが、幸いにも大勢の優れた先輩・同輩・後輩の方々に恵まれて、戦後の目覚ましい経済成長の中にあって「古き良き昭和の時代」の俤が色濃く漂う大学生活を存分に堪能することができたと、その時々の一齣々々を思い出しながら感謝の気持ちでいます。

現役最後の数年には、しばしば深更にまで及んで押し進められた学部・附属病院の改革の作業に、時には心ならずも重責を担わされて立ち会ったことも今は感慨深い出来事のひとつになりました。退官して5年、最近の大学の状況は体感しえませんが、今や世を挙げて変革の嵐が吹き荒ぶ中、従来になかった新たな課題が次々に降り掛かってきている様子を仄聞しています。また、

世を挙げて効率化・成果至上が声高に合唱されようとする風潮にも些かの危惧の念を抱きます。いつの世にも時の風には総じて逆らい難いものですが、世情の振り子は往々にして当初は大振れに過ぎるといふのもまた習いのようなのです。

この時にあっても、変革に向けての諸課題に向き合うには、人の営みのひとつとしての「大学」というものの存在の本質に照らして、その是非を常に自らに問うゆとりが無くてはならず、それあってこそ辿るべき道を踏み外すことなく歩むことができると思います。「大学人が大学での研究・教育の営みに日々真摯に向き合い、それを存分に楽しむ」ところにこそ、その求むべき本来の姿があるかと愚かにも今も考えます。いつの時代にあるうとも、このことが「大学」というものの社会における存立基盤を磐石なものとすると考えられ、歯科領域における医学と医療の最新科学としての深化と進展を担う研究・教育組織としての歯学部が世に立ちゆくことを確かなものにする原動力であると信じます。

鹿児島大学歯学部が、時代は変われども本質において永劫不変の大学の有り様を体現すべく日々研鑽に励み、新しい世紀において一層の発展を遂げることを、OBの一人として心より祈っています。